

# アートがまちを侵食する

〜芸術祭に見るまちなかの展示空間〜

堀内 研目

近年、ヒエンナーレやトリエンナーレといわれる国際的な芸術祭をはじめ、まちなかでのアートのイベントが全国で開催されるようになった。それらの展示空間は美術館のみならず、公園や空きビル、仮設建築など、さまざま。近年の芸術祭で出会ったまちと現代アートの接点を紹介する。

## 横浜トリエンナーレ 2008

「横浜トリエンナーレ」は昨年で三回目となり、日本を代表する芸術祭となった。昨年の会場は赤レンガ倉庫があるエリアを中心に七会場に渡る。中でも日本郵船海岸倉庫の巨大な建築は、現代アートの展示空間として他を圧倒する。この倉庫は一九五二年に建設され、その後日本郵船歴史資料館として活用されてきたもので、二〇〇五年からは横浜市の文化芸術活動の拠点施設として活用されていた建物だ。室内はコンクリート打ち放しの丸柱が特徴で、天井高が五メートル近くあるフロアーが三層も積み重なっている。重厚で荒々しく、飾りのない巨大な空間は、現代アートにとって時に本物の美術館より魅力的な展示環境を提供している。

## 黄金町バザール



横浜トリエンナーレ：日本郵船海岸倉庫  
無骨な物流倉庫の空間は、現代アートとよくマッチする。



小金町バザール：黄金スタジオ  
木造、勾配屋根、縁側など、鉄道の高架下とは思えないアットホームな空間。



金沢アートプラットフォーム：山越ビル  
古い印刷会社のビルを、1Fをアートカフェ、2Fをギャラリーとして使用。

は風俗街として栄えてきたが、地域住民や行政が協働しまちの健全化に取り組んだ結果、まちの浄化は進んだが半面多くの空き店舗を生み出し活気を失うこととなった。そんな状況の中、アートの力を借りて地域再生のきっかけをつかもうと開催されたのが「黄金町バザール」だ。この芸術祭のメイン会場となるのは、横浜市の京浜急行の高架下に整備した「黄金スタジオ」「日ノ出スタジオ」である。「黄金スタジオ」は高架下に長屋のようなアットホームな空間を挿入したアトリエ棟で、訪れた人は気軽に作家やアトに触れ合い、また一緒に制作に参加することができる。その距離感がなんとも居心地のよい体験を与えてくれる。一方「日ノ出スタジオ」はカフェや、物販店舗、ギャラリーなどの小スペースを高架下に迷路のように挿入している。どちらの空間も高架下というデッドスペースに

ヒューマンなスケールの空間を造り、アートを商店街のスケールで見せることでコミュニケーションを創造しようとしている。

「金沢アートプラットフォーム」は金沢市の中心部で昨年十月から十二月にかけて開催された芸術祭である。会場は、商店街や神社、空き家や空きビル、路面電車、公衆便所など、まちのあらゆる要素で作品展示の可能性を試している。それはまるでアートがまちの隅々まで浸食していくような印象であった。中でも、まちに埋もれていた古いビルを利用し、拠点施設として再生させた山越ビルでは、アート作品のレンタルなど、新しい取り組みが始まっている。このビルでの活動は、アートの力で周辺のまちを変えていこうと、芸術祭終了後も継続される。

あいちトリエンナーレ 2010

さて、愛知県でも二〇一〇年に国際芸術祭「あいちトリエンナーレ」の開催が予定されている。横浜のようなダイナミックなスケール、黄金町のようなアットホームなスケール、そして、金沢でのまちの細部のスケール、そうした空間の集合体で、最先端の現代アートを体験することで、新たなまちの魅了にも気付くだろう。そして回を重ねるごとに、われわれ市民に美的な感性が浸透していくような芸術祭を期待している。

# 集合住宅の再生事情

〜日本と韓国の新しい取り組み〜

喜田 祥子

集合住宅は、ドイツが起源とされ、ヨーロッパから国土面積が小さいアジア諸国へと広まった。近年では、アジアにおいても集合住宅の老朽化がみられ、コスト削減や環境への配慮から、建て替えては再生という手法が重要視されている。大学院時代に研究で訪れた日本と韓国の集合住宅において、近年みられる新しい再生手法を紹介したい。

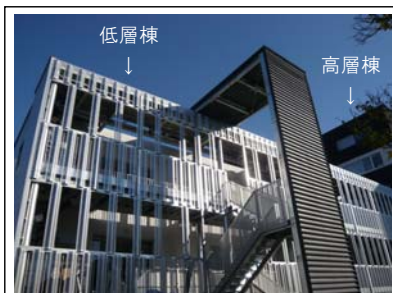
## 日本における集合住宅

日本では、一九〇〇年代初頭に初めて東京都で集合住宅が建築され、それ以降徐々に普及し、高度経済成長期には大量に建設された。

ところが、近年、建築後三〇年、四〇年経過した既存集合住宅のストックが相当な規模となっている。環境負荷の低減などの課題もあり、これまでのスクラップアンドビルド（建替え）から、既存ストックの有効活用が求められ、改造や改修、リフォームやリノベーションといった方法で再生される時代となっている。

## リファイン建築による再生

リファイン建築は、リフォームやリノベーションに比べると、まだ聞きなれない言葉であるが、最近では、コストを抑え、耐震性や環境に配慮した工法として注目されている。リファイン建築は、従来のリフォームやリノベーションとは異なる新しい再生手法として、建築家・青木茂氏が提唱した工法である。様々な再生手法の中でも、リノベーションに最も近い手法と言われているが、リノベーションと異なる点は、建物の再生と同時に耐震補強を行い、新耐震基準に適合させる点である。青木氏によるリファイン建築の定義は、①内外観ともに新築と同等の仕上り、②新築の六〇〜七〇パーセントの予算、③用途変更が可能、④耐震補



リファイン建築で生まれ変わった外装。写真に写っている鉄骨部分は、新規に増築された共同廊下。外観のイメージも一新された。

強により、新耐震設計基準および耐震改修促進法に適合、⑤廃材をほとんど出さず、環境にやさしい、の五原則を満たしているかどうかである。

愛知県でのリファイン建築第一号は、知多郡武豊町にある築二十二年を経過した賃貸集合住宅である。建物や設備に老朽化がみられ、入居率も六〇パーセントを下回っていたことから、平成十八年二月に工事が開始された。構造上必要な柱・梁・壁・床の躯体部分を残し、古くなった設備や建具、内外装のデザインが一新され、共用廊下を増設することで室内面積も拡大されている。また、高層棟と低層棟からなる建物の特徴を活かし、工事を二期に分け、低層棟に一部の入居者が住み続けるという状態で高層棟の工

# 河和田 art camp

朝倉 卓也

福井県鯖江市河和田地区では、アートを取り入れて地域の活性化に「なげよつと」河和田 art camp」という取り組みが二〇〇五年の夏から行われている。学生を中心に夏の長期休暇を利用し、約一カ月間滞在し作品制作、発表までを行い、地域内外の人々が普段とは違うまちを巡り、作品を鑑賞することができる。

## 河和田地区の概要と福井豪雨

福井県鯖江市河和田地区は人口約五千人、漆器産業で有名で「うるしの里」として親しまれている。河和田地区では越前漆器の約八割を生産しており、鯖江市やその周辺では眼鏡・刃物・繊維産業などの伝統産業が今なお受け継がれており、技術ある地域である。越前漆器の歴史は約一五〇〇年と言われており、第二六代継体天皇が壊れた冠の修理の際に、献上された黒塗りの三つ椀の出来栄に感動し、漆器づくりを奨励されたのが発祥とされている。しかし、現在は職人の後継者不足や安価な中国製品などにより地域の活力が低下し、過疎化などの問題も危惧されている。

また、二〇〇四年七月に福井県を中心に被害をもたらした福井豪雨により河和田地区は壊滅的な被害を受け、早急な復



一坪の茶室（2005年作品）と河和田の風景

旧と地域産業の再生を図るためにまちづくり交付金を活用している（一七、八年度）。被災前年には、景観づくり地区に指定され、伝統産業のあるまちとしての再生が復旧への旗印となった。

## 河和田アートキャンプの発端とこれまで

この被災をきっかけに地元の「NPOかわだ夢グリーン」の災害復興支援（夏休みを奪われた子供達に元気を届ける企画）の呼びかけに京都精華大学の学生や若手芸術家などが集まり、「芸術の力」を通して地域環境問題や地域活性化をサポートし「芸術の為の芸術活動」ではなく「芸術活動が社会に貢献できるか」というコンセプトのもと活動を開始している。

二〇〇四年の初年度は、(SABAE MAP PROJECT)としてアートキャンプ準備期間となった。初回は「SABAE MAP 白地図ワークショップ」を行い、地区内外・多分野・多世代と参加者の唯一共有できる情報として、地図上に思い出の場所などをプロットしていった。様々な視点で河和田を再認識することが出来き、その後のワークショップでも、その白地図に情報を重ね、情報が重なる場所などを整理し、地域の資源を発掘している。

アートキャンプ初年度の二〇〇五年は、前年に行われていたプロジェクトをケーススタディとして取り組みを始めている学生を中心とする若者たちが河和田地区の古民家に約二週間泊まり込みながら作品制作し、地域住民とコミュニケーション



養鶏場でのアート展示（2008年作品）

ンを深めていった。また制作に必要な素材は、水害によって発生した廃材や地元産業からの廃棄物を再利用している。作品発表の日は、スタンブラリーで地区内に点在している作品を回り鑑賞してもらった。古民家に泊まり込みながら作品制作し、地域の素材を使うスタイルは現在も継続されており、作品やイベントの幅も広がっている。二〇〇八年では六つの切り口として「伝統とアート・学習とアート・農業とアート・食育とアート・林業とアート・健康とアート」とイベントプロジェクトを合わせたアートキャンプとなっており、使われていなかった養鶏場を作品に生まれ変わらせ、地域の素材を活かし、また再発見させられる作品が多く見られた。

## 河和田アートキャンプの今後

これまで四回のアートキャンプを成功させ、二〇〇九年の夏は節目である五回目の開催となる。河和田地区にとってアートキャンプがきっかけとなり新たな風が吹き込まれ、芸術を切り口に様々な試みが行われている。現在、アートキャンプを統括している京都精華大学 准教授片木孝治氏は、数年後には河和田地区だけではなくもっと広い範囲でアートキャンプを展開し、河和田地区を拠点としてアートという切り口で挑んでいきたいと語っており、そうなった時もう一度この場で紹介したいと思う。

事が開始された。いわゆる「居ながら施工」である。「居ながら施工」は、全住戸が一斉に転居する必要がなく、工事も大掛かりにならずに済むという利点がある。リファイン建築では、一住棟ごとに工事を進めることで、「居ながら施工」が可能となる。また、今回の事例では、高層棟完成後、低層棟の住居者が高層棟へ移動し、低層棟の工事と同時に高層棟の新規入居者も募集された。

## 韓国・ソウルの集合住宅

韓国では、一九七〇年代に高度成長期を迎え、首都ソウルへ人口が集中したことから、この時期に集合住宅が大量に建設されている。また、一九八八年には、ソウル周辺に五年間で二〇〇万戸を供給するという「二〇〇万戸住宅供給計画」が打ち出された。この計画は三年間で達成され、ソウル周辺には五つの新都市がつけられた。韓国では、戸建て住宅よりも階数が五階以上の住宅（韓国ではアパートと呼んでいる）の方が人気は高く、ソウルや周辺の新都市では高層アパートが高密度に建ち並んでいる。

## 集合住宅再生の主流はリモデリング

韓国では、高度成長期に建設された集合住宅の老朽化がみられ始めた一九八〇年代後半から九〇年代前半にかけて、建替えラッシュとなった。しかし、一九九

七年に無分別な建替えが住宅建設促進法により抑制され、二〇〇二年に住宅普及率も一〇〇パーセントに達したことから、次第に再生へと転換されてきている。近年では、リモデリング (Remodeling) と呼ばれる大規模再生が流行となっている。初期のリモデリングは日本のリノベーションに近く、老朽化した設備の取替えや二住居を一つにする二戸一が行われる程度であった。ここ数年は、バルコニーや片廊下の増築による住戸面積の拡張が主流となり、リモデリングが非常に大規模な再生へと変化している。特に、バルコニーは、法規上容積率に含まれないことから、手すり部分を窓に取替え室内化することが一般的となっている。このことを聞き改めてソウルのアパートを見つめてみると、確かにバルコニーがガラスで覆われたアパートが多く、日本人の私からすると非常に不思議な光景でもあった。さらに驚くことに、駐車場不足を解消するために、アパートの下に新たに地下駐車場を設けた事例もあった。地震大国の日本では考えられない手法であると思うが、駐車場不足が深刻な韓国では、非常に人気が高く、地下駐車場の合意率はほぼ一〇〇パーセントだという。

このように、韓国では日本よりも大規模な再生が行われている。元は同じ集合住宅でも、その国の習慣やニーズ、法律等によって形が変化し、再生方法も異なる点は興味深い。両国とも既存集合住宅を多く抱えている。少しでもよりよい再生がなされることを願いたい。



新都市の高層マンション郡。ソウル市内でもよく見かける光景。



バルコニーが増築され、全住戸面積が拡張されたアパート。



新たに設けられた地下駐車場。